

ハイサイ沖縄

7

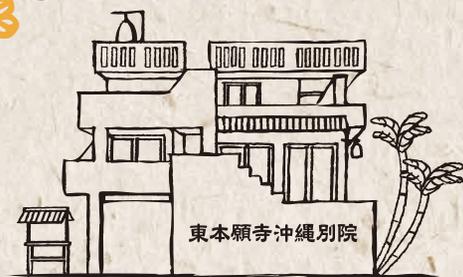
Jul. | 2021
沖縄開教本部通信
vol.94

※「ハイサイ」…沖縄の言葉で「こんにちは」のこと

第二回 「私にとっての沖縄の学びとは」 尾畑文正

- 目次
- 屈辱の日
 - リモートでの「偲ぶ会」
 - コラム 「自己紹介」 知花 一盛

真宗大谷派
東本願寺
SHINSHU OTANI



平和の礎(糸満市)

第二回「私にとっての沖縄の学びとは」

同朋大学名誉教授 尾畑文正

沖

縄出身の同級生から現実と関わらない私の仏教の学びを厳しく問われた五年後、一九七二年に沖縄は二十七年間のアメリカによる統治から日本に返還された。その実態は沖縄の人々が願った「核抜き

本土並み・即時無条件全面返還」ではない。米軍基地は居座り続け、さらに「日米地位協定」により沖縄の人権と平和は脅かされ続けることになった。さらには現在では琉球弧の先端(南西諸島)にまで自衛隊が増強され、島々が軍事基地化されつつある。

私は、当時、沖縄に「即時無条件全面返還」がなされない現実の前で、沖縄に観光では行けない、そんな思いをもった。同朋大学に勤めていた三十五歳の時に、大学院時代の友人から「那覇に素晴らしい人がいる。会いに行ったらどうか」と誘われて、初めて六月の沖縄に旅をした。

素晴らしい人とは当時、那覇の教育委員会に勤める元小学校教員の与那嶺先生でした。安里にある沖縄料理店「うりずん」で先生から「私の仕事は子どもたちが口から食べてお尻から出すまでの(給食と衛生)です。子どもたちの命に関わる仕事をしています」と自己紹介を受けた。その時、初めて「ヌチ(命)・ドウ・タカ

ラ(宝)」の言葉に触れた。私は大学に勤めていたが、教育が命に関わる仕事であるとは思っていませんでした。教育は命に関わる仕事、私はこの言葉で一瞬のうちに沖縄にハマった。

与那嶺先生は沖縄が戦場となり、その大地が血に染まった歴史を淡々と語られた。最後に今度は六月二十三日の「慰霊の日(先生は「反戦平和の日」)に沖縄にきなさいといわれた。その言葉をきっかけにして私は沖縄島をはじめとする琉球諸島に旅をするようになった。各地に残るガマ(自然壕)に入り、戦争体験を聞き、沖縄戦自体が丸ごと本土決戦(国体護持)のための捨て石であり、それは今でいう沖縄に対する構造的差別の実態であることを知った。

その沖縄戦の住民証言集に「人間でなくなる日」(集英社)がある。その著名のように沖縄戦では人間が人間でなくなり、人間であることを奪われた。それが戦争であった。この歴史的現実を身を持って経験することから、私の沖縄の旅は始まった。それは私にとっては「世のくせごと」(御消息集)を通して、「世のいのりにこころいれて(念仏)もうしあわせたまうべし」(同上)と言われた親鸞への旅でもあった。

屈辱の日

「屈辱の日」も低空飛行



琉球新報4月29日付

一九五二年四月二十八日サンフランシスコ講和条約が発効され、沖縄が米軍統治下に置かれ日本から切り離された。日本は「主権を回復した」というが、その間、沖縄は人権よりも軍事が最優先されるようになった。沖縄県ではこの日を「屈辱の日」と呼び、今年で六十九年目である。沖縄平和センターでは那覇市の県民広場で「県民屈辱の日4・28アピール行動」を実施し、参加者ら

は平和を願い、米軍による爆音や事件・事故を糾弾するとともに日本政府への民意を知らせる決意を新たにしていた。しかし、この日も米軍の低空飛行が行われたように事件・事故や環境汚染、県民の人権・安全が脅かされている。来年は沖縄の施政権が日本に「復帰」して五十年を迎える年となるが、県民の願う平和な社会とはほど遠い日々が続いている。

リモートでの「偲ぶ会」

沖縄県名護市にあるハンセン病療養所の沖縄愛楽園自治会長「金城雅春さん」を偲ぶ会「雅春さんと私 リレートーク」が、ハンセン病問題ネットワーク沖縄の主催で、沖縄別院を主配信会場に開催された。コロナ感染が広がる中の三月八日に亡くなられ、関係者のみで葬儀が開催された。そのため個人の関わりが深かった人々の要望で、

四十九日にあたる四月二十五日（日）にリモートを主とした「偲ぶ会」が開催された。沖縄別院に会場したのは十名ほどで、六十余名はリモートでの参加となった。リレートークでは金城さんの「急逝を受け入れることができず、自身の気持ちを整理できず、この会への参加も躊躇した」という声や、「この偲ぶ会を通してあらためて雅春さんが亡くなったことを実感した」と涙しながら語る人が多かった。



ハンセン病問題を介して、多くの人が雅春氏とのゆるぎない人間関係が築かれていたことを感じる会となった。同時に葬儀に人が集まり、故人を語ることの重要な意義をあらためて痛感する機会ともなった。

「コラム」 「自己紹介」

はじめまして、私の名前は知花一盛といいます。読谷村出身の三十三歳です。今年の四月に沖縄に帰ってきました。それまでは京都・山科の大谷専修学院で真宗を学び、卒業後は大阪のあるお寺で、四年間お勤めをさせていただきました。

その寺院は大阪市大正区、大阪の「リトル沖縄」とも呼ばれる地域にあり、戦前・戦後から沖縄の人々が多く住んだ場所です。現在は沖縄二世三世の方が多く住まれていて、沖縄と大阪の文化がマンチャー（まぜこぜ）になっている場所です。

そこでの四年間は、はじめての事ばかりで大変でしたが、いろんな勉強をさせていただきました。そのお寺の住職が「一盛、一異和共生」だよ。大阪もそうだけど、特に大正区には色んな人が住んでいる。大阪、沖縄、鹿児島、韓国、中国、そのほかの地域から来て、それぞれの生活をしながら、一緒にこの街に暮らしている。そのことを忘れんといてね。」と。

私はこの「異和共生」という言葉を胸に、この故郷・沖縄でも誰かに寄り添って、お念仏が出来るように精進していきたいと思えます。どうぞよろしくお願ひします

沖縄別院所属教師（読谷村在） 知花 一盛